

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

芸術系コース(音楽)/長島  
真人

### ■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

#### I. 学長の定める重点目標

##### I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが(平成24年8月28日)、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

#### 1. 目標・計画

平成24年の中央教育審議会の答申をふまえると、変動する社会と少子化現象が問題化していく我が国の動向において、学校教員には、専門的な知識や技を鍛えると同時に、これらを教育実践の場において、臨機に応用することができる実践的な力量が必要とされている。特に、ここでは、子どもたちの学習状況や生活状況を察した、適切な教科指導や生徒指導、特別支援等の力量が必要とされている。したがって、これまで扱ってきた音楽科教育の講義や演習の内容に加えて、授業内容と授業方法、そして、成績評価に関して、次のようなことに留意して授業実践を改善していきたい。

- ①授業内容に関しては、これまで音楽科教育に関する知識の体系として、音楽科教育の本質論、内容論、学習論、授業論、評価論に触れてきたが、音楽と子どもたちと教師との間に生じるシンボリック相互作用に着目した講義が十分に実践できていなかった。つまり、教師と子どもとの間や、子どもたち相互の中で生じる相互作用に着目する講義が十分でなかった。そのため、対話的な指導や話し合いの指導方法を模擬授業等で根拠をもって論評し合うことが十分にできていなかった。そこで、今年度は、新たな授業内容として、コミュニケーションやシンボリック相互作用に関する論理を組み込むことにする。
- ②授業方法に関しては、先に述べたような授業内容を組み込むために、コミュニケーションやシンボリック相互作用に関する講義を工夫すると同時に、模擬授業場面で対話的な指導の中核となる発問の工夫や共有の場を促す工夫に着目した演習を組み込むことにする。
- ③成績評価に関しては、筆記試験やレポートによる評価に留まらず、演習場面での作業課題の達成状況をも評価の対象にすることができるように工夫していく。そのために、有効な作業課題の開発に取り組む。

## 2. 点検・評価

平成24年の中央教育審議会の答申をふまえると、変動する社会と少子化現象が問題化していく我が国の動向において、学校教員には、専門的な知識や技を鍛えると同時に、これらを教育実践の場において、臨機に応用することができる実践的な力量が必要とされている。特に、ここでは、子どもたちの学習状況や生活状況を察した、適切な教科指導や生徒指導、特別支援等の力量が必要とされている。したがって、これまで扱ってきた音楽科教育の講義や演習の内容に加えて、授業内容と授業方法、そして、成績評価に関して、次のようなことに留意して授業実践の改善を試みた。

①授業内容に関しては、これまで音楽科教育に関する知識の体系として、音楽科教育の本質論、内容論、学習論、授業論、評価論に触れてきたが、音楽と子どもたちと教師との間に生じるシンボリック相互作用に着目した講義が十分に実践できていなかった。つまり、教師と子どもとの間や、子どもたち相互の中で生じる相互作用に着目する講義が十分でなかった。そのため、対話的な指導や話し合いの指導方法を模擬授業等で根拠をもって論評し合うことが十分にできていなかった。そこで、今年度は、新たな授業内容として、コミュニケーションやシンボリック相互作用に関する論理を組み込み、講義と演習の双方において、対話的な指導展開を試みた。具体的には、講義で扱う主要な学術的概念を、学生たちが自分なりの方法で解釈し、自立的に知識の体系を創り出していくことが出来るようにするために、発問や探究課題を投げかけ、2、3人の小グループで話し合う時間を設定し、話し合った内容を紹介させ、その内容を板書しながら、学生たちが期待される発想やイメージから学術的な概念に接近していくことができるように対話的な指導を頻繁に試みた。このような試みの結果、学生たちは自分の言葉で多様な発想やイメージを紹介し合いながら授業に積極的に参加し、思考活動が活発になり、学修効果が高まったことを実感した。このような授業は、一方的な説明による講義よりも時間を必要とするが、学生たちの取り組みは積極的になる。したがって、学生たちに注目させる学術的概念を、エッセンスに限定し、量的に限定していく工夫を、さらに検討していきたいと考えている。

②授業方法に関しては、先に述べたように、対話的な指導や話し合いの指導を実現させるために、学生たちの思考活動が望ましい方向に展開されていくような発問の工夫や話し合いの場を工夫した。特に、説明中心の指導のように総花的な情報を紹介することが出来ないの、学生たちが限定された中核的な学術的概念を自分なりに理解し、模擬授業やロールプレイングの場でこの中核的な概念を応用しながら、多様な知識やスキルの体系を広げていくことができるような演習を試みた。模擬授業は、学部1年生では、音楽の授業の中で最も基本的な教授スキルとなる範唱や範読、ソルミゼーション(ドレミを用いて音楽の仕組み直知させる指導法)の演習から始め、学部2年生では歌唱教材の分析的な解釈とピアノ伴奏の演習を展開し、教育実習前の学部3年生では、音楽科教育の学習論や授業論に基づいた学習指導過程の立案やチームティーチングによるマイクロティーチングができるように展開した。また、教育実習の事後指導では、教育実習での成果と課題を教員採用試験の面接試験を想定したロールプレイングの演習を通して、自分の体験を省察し、言語による要約と置き換えのスキルによって他者と分かち合い、自分の教育に関する基本的な考え方が分節的に洗練されていくように指導した。さらに、学部4年生では、教科指導の中に生徒指導に関する話題を関連させ、生徒指導に関する基本的な考え方や対応の仕方についてもロールプレイングを通して探究することが出来るように指導した。そして、教職実践演習では、学生たちが書き綴ってきたキャリアノートを活用し、自分自身の学修経験や生活経験の記録をさらに要約させ、大学4年間の中で育んできた自分自身の成果と課題を明確にさせ、最終的な省察の記録を適正に記述することができるように支援した。

③成績評価に関しては、筆記試験やレポートによる評価に留まらず、演習場面での作業課題の達成状況をも評価の対象にすることができるように工夫した。具体的には、学修の目標に裏付けられた作業課題として、範唱や範読、ソルミゼーションの演習、一冊の教科書だけで、子どもたちに歌唱共通教材を指導する「手ぶら授業」の演習、学術的な論考を授業実践に向けての指導上の留意点として要約する演習、教材となる楽曲を分析し、教材として意味づける演習、学習理論に基づいて学習指導計画や学習指導過程を立案する演習、立案された模擬授業をチームティーチングで協働的に展開する演習、討論の演習を実践し、これらの作業課題に取り組む姿や成果を成績評価の対象にすることができた。特に、このような演習では、個別的な作業よりも、集団的、協働的な作業に取り組ませる方が学修の成果が大きいことが実感された。今後も、作業課題の開発に努力していきたい。

## II. 分野別

### II-1. 教育・学生生活支援

#### 1. 目標・計画

学校教育に対する今日的な社会の要請と学生・院生たちの個々の要求に注意を払いながら、授業の構想と展開、就職支援、課外指導、生活支援を継続的に推進していく。具体的な計画としては、以下のような観点に留意する。

- ①平成19年度に開発した音楽科の授業実践力のスタンダードと平成22年度に開発したカリキュラムマップをふまえながら、音楽科の教科論と授業論を扱う講義の見直しを継続する。
- ②講義だけでなく、演習として、教材分析や指導案作り、模擬授業、ロールプレイングを活用する工夫を継続する。
- ③演習の中で、具体的な作業課題を工夫し、多様なデータから評価が行えるように工夫する。
- ④就職支援として、小論文や自己アピール文等の執筆方法を個別に添削指導する。
- ⑤課外活動の支援として、鳴門教育大学フィルハーモニー管弦楽団の指揮者として、学生たちを指導し、演奏行事等に参加する。
- ⑥オフィスアワーや e-mail を活用して、学生の相談への対応や個別指導が円滑に行えるようにする。
- ⑦クラス担当教員として、キャリアファイルノートガイドラインとして活用しながら、学生たちの修学や大学生活に関する支援・指導を行う。

#### 2. 点検・評価

学校教育に対する今日的な社会の要請と学生・院生たちの個々の要求に注意を払いながら、授業の構想と展開、就職支援、課外指導、生活支援を継続的に推進してきた。具体的な実践においては、以下のような観点に留意した。

- ①平成19年度に開発した音楽科の授業実践力のスタンダードと平成22年度に開発したカリキュラムマップをふまえながら、音楽科の教科論と授業論を扱う講義の見直しを継続的に行った。今年度は、対話的な指導を展開していくために、説明で終わる内容を抜本的に削減し、演習を通して学生たちの思考活動を促し、その成果を集団的な作業で要約させ、最終的に指導者が学術的な概念で整える、という方法を、講義内容の節目ごとに試みた。
- ②講義だけでなく、演習として、教材分析や指導案作り、模擬授業、ロールプレイングを活用する工夫を継続した。先に述べたように、演習の時間を増やすために、授業で扱う学術的な概念を中核的なものに特定するように工夫した。また、学生たちからのリクエストに応じて教材を選び、ともに研究するような場も創り出すことができた。
- ③演習の中で、具体的な作業課題を工夫し、多様なデータから評価が行えるように工夫した。具体的な作業課題は、I-1. ③で詳細に報告した。
- ④就職支援として、メール等を活用して、小論文や自己アピール文等の執筆方法を個別に添削指導した。特に、音楽コースの学部学生たちは、演奏による卒業研究を選択する学生が多く、卒業論文を執筆する体験を得ることが出来ない学生が多いので、この場で、学術的な表現語法を添削指導や対話的な個別指導を通して身につけさせるようにした。このほかに、教員採用試験の一次試験に合格した学生たちのために、二次試験対策として、模擬授業や場面指導、面接、集団討論等の指導を行った。
- ⑤課外活動の支援として、鳴門教育大学フィルハーモニー管弦楽団の指揮者として、学生たちを指導した。今年度は、初心者が多くいるので、アンサンブルの基礎を練習するように助言した。
- ⑥オフィスアワーや e-mail を活用して、学生の相談への対応や個別指導が円滑に行えるようにした。今年後は、就職に関する相談や健康や生活面での相談に来る学生が数名いた。また、保護者から相談を受けることもあった。いずれの場合も、コース内の複数の教員で対応するように心がけた。特に、今年度は、学生課のスタッフとも連携しながら、学生の対応を検討する必要も生じたが、協力体制の中で、問題を解決の方向に向けていくことができた。
- ⑦クラス担当教員として、学修キャリアノートをガイドラインとして活用しながら、学生たちの修学や大学生活に関する支援・指導を行った。特に、今年度は、担当しているクラスの学生たちが3年生になったので、教育実習の事前事後の指導や実習時の指導で、就職に向けての課題意識が高まるように指導した。

## Ⅱ－2. 研究

### 1. 目標・計画

音楽科教育学担当として継続してきた教科の思想の歴史的、哲学的な研究と音楽授業の理論的な研究を推進していくと同時に、教師教育の改善をめざした研究を推進していく。具体的な計画としては、以下のような観点に留意する。

- ①継続研究である「19世紀アメリカにおける学校音楽教育研究」に関して、学会発表や論文執筆を行う。
- ②継続研究である音楽科の授業理論の構築に関する研究を進め、研修会で講義や演習として活用する。
- ③教育実践力の向上をめざす学生たちのための評価スタンダードの活用方法を検討する。
- ④「教職実践演習」の内容とこれに直接的に関連していく「キャリアファイルノート」による学生生活支援のあり方について検討する。

### 2. 点検・評価

音楽科教育学担当として継続してきた教科の思想の歴史的、哲学的な研究と音楽授業の理論的な研究を推進していくと同時に、教師教育の改善をめざした研究を推進した。具体的には、以下のような研究を展開した。

- ①継続研究である「19世紀アメリカにおける学校音楽教育研究」に関して、5月に東京女子大学で開催された音楽教育史学会で「サウスボストンのホーズ学校における唱歌の実験教育の成果：ボストン教育委員会とホーズ学校長ハリントンの見解を中心に」という題目で研究発表を行い、10月に弘前大学で開催された日本音楽教育学会で「サウス・ボストンのホーズ小学校長ハリントンの唱歌教育論：アメリカ教育講習会で明らかにされた講演を中心に」という題目で研究発表を行った。また、9月に、「デーヴィス報告書(1837)がボストン市議会や社会に及ぼした影響：ヘイルの反対意見からホーズ学校での唱歌の実験教育に至る経緯を中心に」という題目で論文執筆を行い、本学の研究紀要に投稿した。また、8月と9月に、ボストン公共図書館稀少本室でボストン教育委員会の史料調査を行った。
- ②継続研究である音楽科の授業理論の構築に関する研究を進め、その成果を免許更新講習と10年次経験者研修の講義や演習で活用した。また、本研究の成果を援用して、県内の小学校の研修会で生徒指導の内容と方法に関する講演や助言を行った。
- ③教育実践力の向上をめざす学生たちのための評価スタンダードの活用方法を検討し、コア科目や教職実践演習の授業内容の開発を試みた。
- ④「教職実践演習」の内容とこれに直接的に関連していく学修キャリアノートによる学生生活支援のあり方について検討してきた。今年度は、初めての試みということになったが、4月の授業開始時には、学生たちが学修キャリアノートに書き綴った内容の省察を促し、総括的に要約して、今後の課題を明確にすることが出来るようなワークシートを開発し、過去3年間の学生生活の成果と課題が一言で語れるように指導方法を工夫した。また、10月からの指導では、夏の就職活動を省察するワークシートを開発し、さらに、残された時間を有効に過ごす方法を展望するように指導した。この後、教科指導と生徒指導を統一的にとらえる演習として、協働力の乏しい学級の子どもたちの指導場面を想定した合唱づくりと仲間づくりの演習を行い、最終的に学修キャリアノートを完成させる演習に取り組んだ。そして、再度、学修キャリアノートの見直しを促し、最終的なチェックリストの記述を完結させた。最終的な段階では、教育者としての使命感や責任感に通底するような生活態度の省察をも促すことができたように思っている。また、この学修キャリアノートの発想は、フィンランドのタンペレ大学の教師教育から学び、開発したものであるが、今年度の3月に、タンペレ大学を訪問し、本学でのキャリアノートは開発の経緯と実際の指導の状況をプレゼンテーションという形態で報告した。この報告に対して、これまで教示を得てきた教授陣からポートフォリオとして適切なものが工夫されているという評価を得ることができた。

## Ⅱ-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

各種委員会活動やFDの活動、学生支援活動において、任務内容に即した活動を展開する。具体的な計画としては、以下の観点に留意する。

- ①各種委員会やコース内での運営に参画し、その任務内容を推進する。
- ②大学の教師教育に関わる研修行事に参画する。
- ③平成23年度学部入学生のクラス担当教員として、その任務を遂行する。
- ④コース長として、コースの教育活動や研究活動、行事等の運営が円滑に展開されるように工夫する。

### 2. 点検・評価

各種委員会活動やFDの活動、学生支援活動において、任務内容に即した活動を展開している。具体的には、以下の観点に留意した。

- ①地域連携委員、免許状更新講習実施委員として運営に参画し、その任務内容を推進した。地域連携委員としては、徳島県内の大学と徳島県教育委員会との連携に関する連絡協議会の教員養成・研修部会に参画し、県内の他大学の代表者と教育委員会のスタッフと協議し、最新の文部科学省の意図をふまえながら、教員養成や教員研修のあり方について、協議しあった。免許状更新講習実施委員としては、先の連絡協議会の教員養成・研修部会での協議と関連させながら、本学の講習のあり方について模索した。
- ②大学の教師教育に関わる研修行事として、教員養成モデルカリキュラムの評価基準・評価方法開発協議会に委員として参画し、カリキュラムの適格判定の内容と方法について検討し、報告書の一部を執筆した。また、コース内で教科内容を検討する作業として、初等教員養成課程での音楽科の教科内容を扱う授業の教科書作りに参画し、音楽鑑賞の分野の執筆を担当した。さらに、カリキュラム・ガイドブックの作成において、音楽コース委のコア科目の内容構成と実践の概要に関する部分を執筆した。
- ③平成23年度学部入学生のクラス担当教員として、その任務を遂行した。3学年になったクラスの学生たちの学修相談や生活支援を行った。10月の合宿研修以降は、本格的な就職支援活動を開始した。
- ④コース長として、コースの教育活動や研究活動、行事等の運営が円滑に展開されるように工夫した。特に、今年度は、生活上で支援を必要とする学生に対して、学生課や学生相談の専門家、保護者と連絡を取りながら、コース内の複数の教員で問題の解決や支援の方法を検討し、学生たちを見守った。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

音楽科教育学の最新情報をふまえながら、附属学校や公立学校、学会組織の研究・運営活動に参画し、連携を深める。具体的な計画としては、以下のような観点に留意する。

- ①附属小・中学校の教育研究活動に参画し、事前の研究協議会や研究大会に参加する。
- ②日本学校音楽教育実践学会や日本教科教育学会、音楽教育史学会、中国四国教育学会等において、学会の組織作りや研究大会の準備、紀要編集等に協力する。
- ③学部の教育実践コア科目である「初等中等教科教育実践Ⅱ」、「初等中等教科教育実践Ⅲ」の講義を実施するために、教科内容学担当の教員と附属学校の教諭、公立学校の教諭と連携し、本学の教師教育のためのコア・カリキュラムの具体的な展開方法を工夫する。
- ④音楽科教育学の立場から、「免許更新講習」と「10年経験者研修」の講義と演習を計画し、実践する。
- ⑤教員研究留学生を迎え、留学生の意に沿った研究支援ができるように工夫する。

### 2. 点検・評価

音楽科教育学の最新情報と文部科学省が明らかにしている生徒指導のガイドラインをふまえながら、附属学校や公立学校、学会組織の研究・運営活動に参画し、連携を深めた。具体的には、以下のような観点から活動した。

- ①附属小・中学校の教育研究活動に参画し、音楽科の授業実践研究に関して、事前の研究協議会や研究大会に参加した。このほかに、徳島県の中学校の音楽教育研究部会からの依頼で、山口県の防府市で開催される中国・四国音楽教育研究大会で研究発表を行う徳島中学校の音楽教諭の助言を行った。また、徳島県の小学校の生徒指導研究部会の研修行事に参画し、三次市と阿南市で講演を行い、夏期研修会や市場町の大俣小学校での研修会で助言を行った。1月31日に開催される徳島県小学校教育研究会の主題研究大会に参画し、生徒指導部門で助言を行った。
- ②日本学校音楽教育実践学会や日本教科教育学会、音楽教育史学会、中国四国教育学会等において、学会の組織作りや研究大会の準備、紀要編集等に協力した。今年度は、7件の投稿論文の査読を担当した。
- ③学部の教育実践コア科目である「初等中等教科教育実践Ⅱ」、「初等中等教科教育実践Ⅲ」の講義を実施するために、教科内容学担当の教員と附属学校の教諭、公立学校の教諭と連携し、本学の教師教育のためのコア・カリキュラムの具体的な展開方法を工夫した。
- ④今年度も、音楽科教育学の立場から、「免許更新講習」と「10年経験者研修」を開講し、講義と演習を計画し、実践した。
- ⑤ハンガリーから教員研究留学生を迎え、留学生の意に沿った研究支援ができるように工夫した。

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

地域連携センターの外国人客員研究員として、これまで何度も教示を得てきたフィンランドのタンペレ大学のリタ・ヤーティネン先生を招聘し、教師教育についての学術的な交流の場を広げてきた。また、国際交流事業として、3月に、言語系コース(英語)の伊東教授と共に、フィンランドのタンペレ大学に表敬訪問し、教育学部長や附属学校部長と対面し、本学との姉妹提携の依頼を行った。また、これまでタンペレ大学から学び、開発してきた本学の学修キャリアノートの開発の経緯と指導方法について、プレゼンテーションを行ってきた。ここでは、本学の学生たちの学修状況に適したポートフォリオとして、評価を得ることができた。